TADOKU JUNIOR やさしい名作リーダー ★★★☆☆ ふつう 881語

The Hammer Lost and Found

なくなったハンマー

E. Louise Smythe（1904年の本） 原文そのまま 朗読：Sarah Jennings、Abby

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ トールのハンマーが、しもの大男にぬすまれた！返してほしければ、女神フレイヤをおよめさんによこせと言うのです。そこでトールがとった、思いがけないさくせんとは……。

The Frost Giants did not like the sunshine. They did not like to see the flowers. They did not like to hear the birds sing. They wanted to spoil everything.

The Frost Giants wanted to get into Asgard. But they did not know how. They were afraid of Thor and his hammer. They said, "If we can only get the hammer, we can get into Asgard."

They talked and planned all night. At last one Frost Giant said, "I know how we can get the hammer. I will dress in a bird suit. Then I will fly up to Thor's house and get the hammer."



Freyja

The next night the Frost Giant flew into the house while Thor was asleep.

He took the hammer and flew away with it.

When Thor woke, he put out his hand to get the hammer. It was gone.

He said, "Loki, the hammer is gone. The Frost Giants have taken it. We must get it back."



Loki said, "I can get it back, if Freyja will let me have her falcon suit."

So he went to Freyja and said, "Will you let me have your falcon suit? I can get the hammer back if you will." Freyja said, "Yes, of course I will. If I had a gold suit you could have it. Any thing to get the hammer back."

Thrym

Loki took the falcon suit and put it on. He flew over the city. All the people saw him flying. They said, "What a strange bird!" They did not know that it was Loki going for the hammer.



When Loki came to the city of the Frost Giants, he took off the falcon suit. He walked and walked until he came to Thrym's house. Thrym was the giant who took the hammer. Thrym was sitting on the porch, making gold collars for his dogs.

When he saw Loki, he said, "What do you want?"

Loki said, "I have come for the hammer."

The old giant laughed and said, "You will never get that hammer. It is buried eight miles deep in the ground.

"But there is one way you can get it. I will give you the hammer if you get Freyja for my wife."

So Loki went back to Asgard.

Thor said, "Well, did you get the hammer?"

"No, but we can get it if Freyja will be Thrym's wife."

Then they went to Freyja's house. They said, "Put on your very best clothes and come with us. You must be Thrym's wife."

Freyja said, "Do you think I will be the Frost Giant's wife? I won't be his wife."

Thor said, "We can get the hammer back if you will."

But Freyja said, "No, I will not be his wife."

Loki said, "You will have to, if we get the hammer back."

Still Freyja said, "I will not go." And she was very angry. She shook so hard that she broke her necklace and it fell to the floor.

Then the gods said, "Thor, you must dress like Freyja. You will have to play you are the bride."

Thor said, "I won't do it. You will all laugh at me. I won't dress up like a girl."

They said, "Well, that is the only way we can get the hammer back."

Thor said, "I do not like to dress like a girl, but I will do it." Then they dressed Thor up like Freyja.

They put on Freyja's dress, necklace and vail, and braided his hair.

Loki said, "I will dress up too, and be your servant."

They got into Thor's goat wagon and went to the Giants' home.



When the Frost Giants saw them coming, they said, "Get ready, here comes the bride! We will sit down to the table as soon as they come."

The dinner was ready on time. The table was full of good things. All sat down.

The bride ate a whole ox and eight salmon before the others had a bite.

"She must be very hungry," the Frost Giants said.

"Yes," Loki said, "she was so glad to come. She hasn't eaten anything for eight days."

Then they brought in the mead.



The bride drank three barrels of mead.

"How thirsty she is!" said the Frost Giants.

Loki said, "Yes, she is very thirsty. She was so glad to come. She did not drink anything for eight days."

Old Thrym said, "I had every thing I wanted but Freyja. Now I have Freyja."

And Thrym went to kiss the bride. He lifted her vail, but her eyes shone like fire.





Thrym stepped back. He said, "What makes Freyja's eyes shine so?"

Loki said, "Oh, she was so glad to come. She did not sleep for eight nights."

Then Loki said, "It is time for the hammer. Go and get it and put it in the bride's lap."

As soon as the hammer was in his lap, Thor tore off the vail.

He took the hammer and whirled it around. Fire flew from it. The fire burned the house and the Frost Giants ran away.

So Thor got his hammer back.

The following stories by Miss Smythe were originally published under the title of "The Golden Fleece." They have been carefully revised and illustrated for this

book.

しもの大男たちは、お日さまの光がきらいでした。花を見るのもきらいでした。鳥の歌を聞くのもきらいでした。しもの大男たちは、何もかもだめにしてしまいたかったのです。

しもの大男たちは、アスガルドに入りこみたいと思っていました。でも、どうしたらいいかわかりませんでした。トールとトールのハンマーが、こわかったのです。大男たちは言いました。「ハンマーさえ手に入れば、アスガルドに入れるのに。」

大男たちは、ひとばんじゅう話し合って、計画を立てました。とうとう、ひとりのしもの大男が言いました。「ハンマーを手に入れるほうほうがわかったぞ。わしが鳥の服を着よう。そしてトールの家まで飛んでいって、ハンマーをとってくるのだ。」

フレイヤ

次の夜、トールがねむっているあいだに、しもの大男はトールの家に飛びこみました。

大男はハンマーを取って、それを持って飛び去りました。

トールは目をさますと、ハンマーを取ろうと手をのばしました。ハンマーがありません。

トールは言いました。「ロキ、ハンマーがなくなった。しもの大男たちがとっていったんだ。とりもどさなくては。」

ロキは言いました。「フレイヤがハヤブサの服をかしてくれたら、とりもどせるよ。」

そこでロキはフレイヤのところへ行って言いました。「ハヤブサの服をかしてくれないかい？かしてくれたら、ハンマーをとりもどせるんだ。」フレイヤは言いました。「ええ、もちろんかしてあげるわ。金の服だって、持っていたらかしてあげるところよ。ハンマーがもどるなら、何だってするわ。」

スリュム

ロキはハヤブサの服を受け取って、着ました。ロキは町の上を飛んでいきました。町の人たちはみんな、ロキが飛んでいるのを見ました。人々は言いました。「なんてふしぎな鳥だろう！」それがハンマーを取りに行くロキだとは、だれも知りませんでした。

ロキはしもの大男たちの町に着くと、ハヤブサの服をぬぎました。ロキはどんどん歩いて、スリュムの家に着きました。スリュムは、ハンマーをとった大男でした。スリュムはげんかんの前にすわって、犬たちのために金の首わをつくっていました。

ロキを見ると、スリュムは言いました。「何の用だ？」

ロキは言いました。「ハンマーを返してもらいに来た。」

年とった大男は笑って言いました。「あのハンマーは、決して手に入らないぞ。地面の下、八マイルも深いところにうめてあるのだからな。

だが、手に入れるほうほうが一つだけある。フレイヤをわしのおよめさんにつれてきたら、ハンマーをやろう。」

そこでロキは、アスガルドに帰りました。

トールは言いました。「どうだ、ハンマーはとりもどせたか？」

「いいや。でも、フレイヤがスリュムのおよめさんになれば、とりもどせるよ。」

そこで二人は、フレイヤの家へ行きました。二人は言いました。「いちばんいい服を着て、いっしょに来ておくれ。スリュムのおよめさんになってもらわなくちゃならないんだ。」

フレイヤは言いました。「わたしが、しもの大男のおよめさんになると思うの？あんな大男のおよめさんになんか、ならないわ。」

トールは言いました。「きみがなってくれれば、ハンマーをとりもどせるんだ。」

でもフレイヤは言いました。「いやよ。あの大男のおよめさんにはならないわ。」

ロキは言いました。「ハンマーをとりもどすには、ならなくちゃだめなんだよ。」

それでもフレイヤは言いました。「わたしは行かないわ。」そして、フレイヤはかんかんにおこりました。あまりにはげしく体をふるわせたので、首かざりがちぎれて、ゆかに落ちてしまいました。

そこで神さまたちは言いました。「トール、きみがフレイヤのかっこうをするんだ。花よめのふりをしなくちゃいけないよ。」

トールは言いました。「そんなことはしないぞ。みんなに笑われてしまう。女の子のかっこうなんか、しないぞ。」

神さまたちは言いました。「でも、ハンマーをとりもどすには、それしかほうほうがないんだよ。」

トールは言いました。「女の子のかっこうをするのはいやだけど、やるよ。」そこで神さまたちは、トールにフレイヤのかっこうをさせました。

フレイヤのドレスを着せて、首かざりをつけ、ベールをかぶせ、かみの毛をあみました。

ロキは言いました。「わたしも着がえて、きみのめし使いになろう。」

二人はトールのヤギの車に乗って、大男たちの家へ向かいました。

しもの大男たちは、二人がやってくるのを見て言いました。「したくをしろ、花よめが来たぞ！着いたらすぐに、テーブルについてごちそうだ。」

ごちそうは、時間どおりにできあがりました。テーブルは、おいしいものでいっぱいでした。みんながせきにつきました。

ほかの者たちがひと口も食べないうちに、花よめは牛を一頭まるごと、サケを八ぴきもたいらげました。

「よほどおなかがすいているんだな。」としもの大男たちは言いました。

「ええ、」とロキは言いました。「ここへ来るのがうれしくてたまらなくて、八日間なにも食べていないんですよ。」

それから、はちみつのお酒が運ばれてきました。

花よめは、はちみつのお酒をたる三つ分も飲みほしました。

「なんてのどがかわいているんだ！」としもの大男たちは言いました。

ロキは言いました。「ええ、とてものどがかわいているんです。ここへ来るのがうれしくてたまらなくて、八日間なにも飲まなかったんですよ。」

年とったスリュムは言いました。「わしは、フレイヤのほかは、ほしいものは何でも持っていた。そして今、フレイヤも手に入れたぞ。」

そしてスリュムは、花よめにキスをしようとしました。スリュムがベールを上げると、花よめの目が火のようにぎらぎら光っていました。

スリュムは、思わずあとずさりしました。スリュムは言いました。「どうしてフレイヤの目は、あんなに光っているんだ？」

ロキは言いました。「ああ、ここへ来るのがうれしくてたまらなくて、八ばんもねむらなかったんですよ。」

それからロキは言いました。「さあ、ハンマーの時間ですよ。ハンマーを持ってきて、花よめのひざの上においてください。」

ハンマーがひざの上におかれたとたん、トールはベールをむしり取りました。

トールはハンマーをつかんで、ぐるぐるふり回しました。ハンマーから火がとび出しました。火は家をもやし、しもの大男たちはにげていきました。

こうして、トールはハンマーをとりもどしたのです。

このあとのスマイス先生のお話は、はじめ「金の羊毛」という題でしゅっぱんされたものです。この本のために、ていねいに手直しをして、さし絵をつけました。

たんご と クイズ　なくなったハンマー

sunshine お日さまの光	**hammer** ハンマー	**falcon** ハヤブサ
dogs 犬	**necklace** 首かざり	**bride** 花よめ
goat ヤギ	**salmon** サケ	

Q1 スリュムが、ハンマーを返すかわりにほしがったものは？

① ハヤブサの服　② フレイヤをおよめさんにすること　③ 金の首わ

Q2 花よめのふりをしてスリュムの家へ行ったのはだれ？

① トール　② フレイヤ　③ スリュム

Q3 ロキは、花よめがたくさん食べた理由をなんと言いましたか？

① 大男のりょうりがおいしかったから　② もともと大食いだから

③ うれしくて八日間なにも食べていないから

こたえ

Q1　②　スリュムは「フレイヤをおよめさんにつれてきたら、ハンマーをやろう」と言いました。

Q2　①　フレイヤがことわったので、トールがフレイヤのドレスやベールを身につけて、花よめのふりをしました。

Q3　③　ロキは「ここへ来るのがうれしくて、八日間なにも食べていない」とごまかしました。本当はトールだったからですね。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #7841（E. Louise Smythe、1904年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1904 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Sarah Jennings、Abby（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。